

研究タイトル：最近の FIFA ワールドカップ 3 大会の GK のシュート処理法の変化



| | | | |
|-----------------|--|---------|------------------|
| 氏名： | 伊藤 耕作 / ITO Kosaku | E-mail： | itok@ube-k.ac.jp |
| 職名： | 准教授 | 学位： | 博士(体育科学) |
| 所属学会・協会： | 日本体育学会, 日本コーチング学会, 日本フットボール学会 | | |
| キーワード： | ルール改正, 競技力向上, ゲーム分析 | | |
| 技術相談 提供可能技術： | <ul style="list-style-type: none"> ・競技スポーツのルール改正に関する研究 ・スポーツ選手の競技力向上に関する研究 | | |

研究内容：

近年、ボールに極力回転を与えないように蹴り出すことでボールの飛翔軌跡を不規則に変化させるキック(無回転ブレ球キック)が注目されています。このキックは、GK がその軌跡を予測できないことからセービングが困難であり、得点の可能性が高いロングシュートとして認識されています。無回転ブレ球キックが多用されるようになった背景には、2006年、2010年ワールドカップで導入された公式試合球(チームガイスト、ジャブラニ)の影響が指摘されています。これらのボールは、従来に比べて不規則な変化を生み出すボールとして実験的に確認されており、GK のシュート処理法に大きな影響を及ぼしていることが考えられます。

図1は、最近の FIFA ワールドカップ 3 大会の GK のシュート処理法を示しています。新型ボールが導入される以前の WC02 では、GK は枠内シュートの約 6 割をキャッチングしていますが、ボールが変わった WC06 以降では、シュートをキャッチする割合が減少し、シュートを弾く割合が増加していることがわかります。無回転ブレ球シュートを、従来のキャッチング法で対応すると、ボールをファンブルして相手選手に拾われる可能性が広がります。そこで、ボールをキャッチするより外に弾いてプレーを切ることが優先されるようになったと考えられます。

図2、3は、GK のシュート弾き方の種類と、その後の対応を示しています。WC06 に増加したシュートを片手で弾いて CK に処理する方法は、WC10 には減少し、それに変わってシュートを両手で弾く処理法が増加していることがわかります。ボールを弾いて CK に処理する方法は、相手に二次攻撃を与えます。そこで WC10 では、ボールを両手で確実に弾いて自らキャッチ、ないしは味方選手に処理させることが意図されたと考えられます。しかしこの処理法は、相手選手にボールを拾われる割合が増加します。今後は、GK が弾いたボールを味方選手と連携して処理することが求められるといえるでしょう。

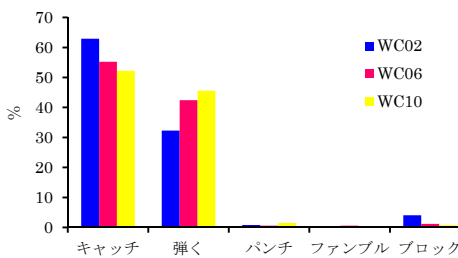


図1. GKのシュート対応

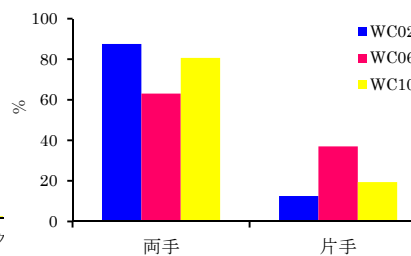


図2. GKのシュートの弾き方

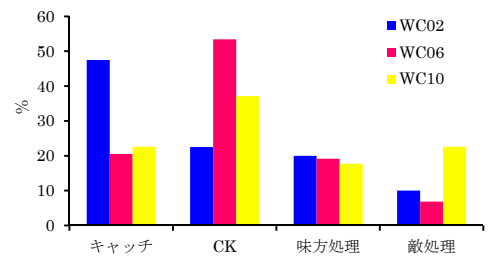


図3. GKのシュートを弾いた後の対応

提供可能な設備・機器：

| 名称・型番(メーカー) | |
|-------------|--|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |